

猪田 省司

援農 岩見沢・美唄・南幌・栗沢

1942 年（昭和 17 年）4 月、私は三井美唄国民学校から岩見沢中学に進学。

配布された学校要覧の第 1 ページは『決戦生徒訓』である。

- ・自覚セヨ 我等ハ神国日本ノ臣民ナリ
- ・学校モ戦陣 学業ヲ励ンデ御奉公ノ誠ヲ尽クセ
- ・国運ヲ賭シテノ戦ダ 必勝ノ信念ヲモッテ最後マデ頑張レ

緒戦の勝ち戦から、学年が進むにつれて、戦は熾烈なものになっていく。

一年生の授業は平常に近いものであるが、勤労働員として、日帰りの援農^{*1} 作業はたびたびあった。主に岩見沢の西川向、東川向方面である。学級毎に徒歩で出かけ、田植え、田の草取りなどに汗を流す。

田んぼの畔で担任の柴崎重人先生から訓示やら説教やらを承る。

級長の芳賀 綏は、声帯模写、形態模写の名人で、諸先生の授業のさわりを生き生きと再現し級友一同舌を巻き、かつ、大喜びをする。

この学年の授業日数は、243 日、ほかに特別出席日数 27 日という記録がある。これが勤労働員の日数かどうかは不明である。

1943 年（昭和 18 年）、二年生のときには農家に泊り込みの援農となる。

家郷隆文は、『春から一週間、農家に分宿して草取りをする。夕方になると家恋しさにしんみりした。』と回想しているが私には思い出せない。日帰りの援農は何日かあった。

秋の一週間は美唄に来了。空知神社境内で国民服、戦闘帽、巻脚絆姿の本庄英次町長の激励を受けた後、南沼の内、宮西宅に行く。

作業は毎日稲刈りだ。

茶碗に群がるハエを手で払いながらご飯を食べる。泥炭地の赤い水でひどい下痢を起こし、ランプの灯も消えた夜半、手さぐりで外に出る。雨に打たれ、ぬかるみに足をつっ込みながら納屋にある便所に通ったときは、もう泣き出しそうだった。

その家のおじいさんは、南米移住の経験があり、英語で話しかけられたことを覚えている。

この年、美唄では、道内外の学徒等の動員を要請し、延 12 万余の労力を農村に送り、生産の維持増強を図ったという記録がある。

学校の授業日数は、286 日となっている。

1944 年（昭和 19 年）春、父が言うには、『戦争が激しくなり、中学生は作業ばかりになるから、退学して炭鉱にでも勤めるように』と。ショックを受けながらも学校から退学願の用紙を貰う。どんな経緯で退学をせずに新学期を迎えたかは、わからない。

政府は、『学徒戦時動員体制確立要綱』（昭和 18 年 6 月）から、『学徒勤労働員方策要綱』（昭和 19 年 1 月）へとさらなる動員強化を決定。その方針に、『勤労即教育ノ本旨ニ徹シ総合的且計画的ナル学徒勤労働員ヲ強力ニ実施シ戦力増強ニ挺身セシムル』としている。

それが翌 2 月の『決戦非常措置要綱』では『中等学校程度以上ノ学生生徒ハ総テ今後一年、常時之ヲ勤労其ノ他非常任務ニ出動セシム』となる。その方針により『休暇・日曜日ノ休業ハ原則トシテ之ヲ廃ス』と決まり、ここから事実上通年動員態勢に入るのである。父の心配

は現実のものとなり私も不安が募る。

わが三年一組は5月15日、幌向村（現南幌町）に向かう。駅から馬車で栗山の遠藤清昭と2人、十三線、熊木宅に入る。

田植えの準備とその本番等懸命に働く。

7月には栗沢の上幌地区、井上為助宅に移動する。このときも遠藤と一緒に。

水田を這うようにして一株一株草を取り、泥の中に押し込んだり、根を張ったヒエを抜き取ったり、思い除草機を押したりもした。

とても清潔な農家だが、生活用水はすべて農業用水路の水を使っている。

9月、稲刈りの時期、砺波部落、佐々木宅に移る。同僚は美唄炭山の伊藤信夫。ここには、三笠の炭鉱から女性が二人が泊りがけの出面に来ており、若い方は美貌であか抜けした人で、夜は話がはずみ、昼の疲れを癒すことができた。

しかし、この頃体調が悪くなり、診療所に何日も通う。

巡回に来られた高橋徹先生に予科練（甲種飛行予科練習生）に征くようにすすめられたがこれには応じなかった。

5月から10月まで、月月火水木金金*2の援農作業の明け暮れである。

どの農家も、若き働き手は出征中。じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん（ねえちゃん）が農家の戦力である。

炭鉱動員 夕張

援農に続いては炭鉱への動員である。

学級全員、夜具を背負って夕張炭鉱住染合宿に入ったのは11月、大雪の日だった。

各室に四、五人ずつ割り当てられる。作業は、セメント、鋼材、木材等の運搬、輪車路の除雪等々、援農とは異なる重労働が春まで続く。身長150センチ、体重41キロ、小柄でやせっぽの私の全身の骨にも筋肉にも苛酷な負担である。

毎朝、出動のとき、冒頭に掲げた『決戦生徒訓』を唱和し、隊伍を整えて現場に向かう。

すれ違う女性に手を振ったら応答有で有頂天になったことも。

担任の林栄太郎先生は数学の先生で、夜分集会室で数学二類（解析）の指導をしてくださる。それにも、3回ほどか。自学自習が建前であるが、もはやそれができる状況ではなくなる。

橋本稔が、石坂洋二郎の『若い人』、田中英光の『オリンポスの果実』など貸してくれ、初めて小説の愉しみを知る。

遠藤清昭はアコーディオンを弾いて慰めてくれる。ヨハン・シュトラウスのワルツも口づさむようになる。

茂泉等は歌の名手。『新雪』『ローレライ』など彼から教わる。

軍歌とともに、『勘太郎月夜歌』『誰か故郷を想わざる』『夜のタンゴ』『夢去りぬ』などよく歌ったものだ。

岡村忠一が脳膜炎に罹り入院。宿舎は消毒。私たちは禁足となり不安な時期もあった。

同じ宿舎に秋田鉱山専門学校勤労報国隊*3も入っており、隣室の福田さんからおやつをいただいたり、話を聞いたりもした。

そんな中、茂泉等、瀬戸充次が海軍兵学校に、その他予科練、特幹（特別幹部候補生）等に進むものを何人も夕張駅頭から軍歌で送り出す。

私は毎朝、宿舎の隣にある夕張神社に詣で戦勝と級友らの武運を祈る。

通知箋の出席状況欄は空白になっているが、動員日数は320日に及ぶものと思う。

担任からの私へのメッセージ。

『此ノ一年間良ク奮闘シテクレタ。涙グマシイ努力ヲシタ。我ノ修養トトモニ良ク人ヲ指導シタ。苦シイコトモアッタロウ。不平一ツ云ワズニ態度厳正、信念ヲ以テ戦ッタ。』

鉄道除雪・夏山造林 幾春別・角田

1945年（昭和20年）4月5日、始業式に登校。

『全学徒ヲ食糧増産、軍需生産等直接決戦ニ緊要ナル業務ニ総動員ス。学校ニ於ケル授業ハ一年間之ヲ停止ス』

という『決戦教育措置要綱』により、動員の準備を整え、4月10日、帝室林野局（現林野庁）幾春別伐木事業所に出動する。

四年一組は総員54人。夕張で流脳に罹った岡村はまだ入院中。病気残留者は8人。田中志郎、市川善吉、寺沢広、前山巖、坂東聡は学校残留。幾島春男は支庁に、太田昭三は勤労働員署に、西川直司は配電会社に行きそれぞれ軽労働に従事。

宿舍の幾春別炭鉱一心会館に入るもの46人。

朝、宿舍を出て、森林鉄道に乗って御料林*4に入り、鉄道の除雪をしたり、保線の仕事をするのが主な任務である。

5月3日、山奥の八角堂に宿舍を移す。

どちらの宿舍も一つの広いフロアに全員がざこ寝をする。級友同士、親しみを増すものあり、反目するものあり。

食糧事情は悪いなか、勤労報国隊への特配で米の飯は十分だ。副食らしいものはなく、連日、玉ねぎのみそ汁と漬物であった。

中島茂、伊東孝、小野隆夫は病気になり帰宅。横田勉は負傷して休業。上田恒夫は陸軍経理学校受験に。

5月27日に引き上げるまで、公休日が3日、山祭りで帰省を許された日が4日である。

- ・学徒勤労働員第二次 万字・角田方面、6月1日入山のこと

- ・勤労の中に総ての教育を施すこと

（読書指導、自習指導、健康の指導）

- ・要するにどんな犠牲があっても生産を増強せねばならぬ

6月1日、栗山角田鉱山松原造林部に19人、栗沢万字炭山伊藤造林部に21人、学級は二つに分けられ、夏山造林に動員される。

夕張鉄道新二岐駅から数キロ山に入った宿舍は、土間に荒むしろを敷いただけのもの。真中に通路をとり、その両側に布団を並べる。ここも米の飯には恵まれていたが来る日も来る日もフキの入った汁だけの食事だった。

作業は、まず山肌を崩して、木材を運び出す林道を作ることから始まる。次に杣夫*5の伐り倒した木材を運び出す。大きな鳶口で木材をすべらせながら運ぶ。藪出しと呼ぶ作業だ。

大きな鋸で木を伐る者もいる。ブヨや蚊に攻められ、ウルシに悩ませながら苦闘する。

今井淳は重症のウルシかぶれで、水泡が破れ、高熱でダウン。徹夜の看病をする。遂には帰宅療養となる。伊藤信夫、橋本稔、沢田努、畠山晃、新田睦敏、桑野久司も病気のため帰宅。

角田鉱で強制労働に従事する中国人俘虜*6が生ける屍の如き姿でいるのを目にして心を痛

める。

6月 は 3日、7月 は 2日半、雨降りのため作業を休む。

8月 12日、担任林先生からの注意事項

- ・ 作業は国家枢要のもの、規律厳正、時間厳守で最後まで敢闘せよ。
- ・ 一日一日の作業は通年の試験であることに思いを致し、国家のために奉仕せよ。
- ・ 卒業するまでは岩中の生徒であり、俺の受持生徒であるから俺の指揮に従え。

翌日、お盆の休暇で帰省。15日、私の陸士（陸軍予科士官学校）入学のため、岩見沢の原照夫の家で壮行会を開いてくれる。そこで戦争終結の玉音放送を聞く。16日、現場に戻るが、23日引き揚げ決定、山を降りる。一年半ぶりにきびしい勤労働員から解放され学校に戻ることができた。授業は再開されたが、半年ほどで卒業を迎える。

中学用年間在学したがその半分は勤労働員に献身。何等疑念も抱かず『決戦生徒訓』を忠実に実践し、紅の血を燃やしたのである。

あゝ紅の 血は燃ゆる

一 花も蕾の 若桜

五尺の生命 ひっさげて

国の大事に 殉ずるは

我等学徒の 面目ぞ

あゝ紅の 血は燃ゆる

三 君は鋏執れ 我は槌

戦う道に 二つなし

国の使命を 遂ぐるこそ

我等学徒の 本分ぞ

あゝ紅の 血は燃ゆる

（学徒勤労働員の歌 昭和19年）

回想

学校長 熊谷清高先生

『学業を放棄しての筋肉労働は精神的なあせりや不安を伴った。当時の若い彼等にとっては、虚しく辛い日々であったと思われる。』（岩見沢東高等学校五十年史より）

担任 林 栄太郎先生

『皆さんが落ち着いて勉強できたのは一年生のときだけ。三年生の頃から戦争がいつそう激しくなり、勤労働員と称して、今日では想像もつかない大変な御苦勞をしました。』

（戦後四十年、同期会の挨拶より）

（いのだ まさし 昭和4年生まれ）

***1 援農** 食糧増産の掛け声のもと、男手を戦地にとられた農家を支援するために、学生などが農村に動員された。これを「援農」といい、美唄町でも道内、道外からの援農に多数の人が来ていた。

***2 月月火水木金金** もとは海軍で、土曜、日曜も返上して連日訓練に励んでいるという意味で使われていた。

昭和 15 年には「月月火水木金金」のタイトルのレコードが発売され（高橋俊策作詞・江口夜詩作曲）ヒットした。

国民は、「休日返上」を美德として、戦争協力のため勤労に励んだ。

***3 勤労報国隊** 昭和 16 年 11 月の「国民勤労報国協力令」により、勤労奉仕の義務が法制化され、国民の動員体制が強化された。昭和 18 年 5 月には「勤労報国隊整備要綱」が決定され、町内又は部落単位で勤労報国隊が結成された。

***4 御料林** 皇室所有の森林のこと。

***5 杣夫** 伐木、造林に従事する林業労働者の旧称。

***6 中国人俘虜** 実際には俘虜（捕虜）ではなく、中国大陸から強制連行された人々。北炭角田鉱には、291 人が連行され、72 人が死亡した。